様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６３３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６６００１８

研究課題名（和文）乳がん合併妊産婦の看護ケアスタンダードの構築

研究課題名（英文）Development of nursing care standard for pregnancy-associated breast cancer patients

研究代表者
片岡　弥恵子（KATAOKA, Yaeko）

聖路加国際大学・看護学部・准教授

研究者番号：７０２９７０６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,900,000円、（間接経費）　870,000円

研究成果の概要（和文）：研究目的は、乳がん合併妊産婦の事例を集積し女性の状況と支援の実際を明らかにし、医療者へのインタビュから医療施設における支援の促進および阻害因子を検討した。その結果、乳がん合併妊産婦は徐々に増加していた。75%が腫瘤の自覚により乳がんを発見しており、発見時のStage分類はStage2aが最も多く35%であった。半数以上が妊娠中に手術または化学療法を行っていたが、産後には70%が健側の授乳を行い、女性に満足感または納得感を生みだしていた。医療施設においては、チーム医療が中心であり、ケアプロトコル作成と医療者へのトレーニングが必須である。

研究成果の概要（英文）：The aims of this study were to report pregnancy-associated breast cancer cases especially their diagnosis, treatment and support through pregnancy to postpartum, and to examine promoters and barriers to implement support in prenatal settings. The incidence of breast cancer in pregnancy was increasing. 75% of women found tumor by themselves, and 35% were diagnoses with stage 2a. More than half women had surgery and chemotherapy during pregnancy. 70% of them could breastfeed for their baby and felt satisfied. Team approach is imperative, in addition, care protocol and training are necessary for health care providers.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：看護学　助産学　乳がん　周産期　事例研究

１．研究開始当初の背景

乳がんは、全世界で毎年 110 万人以上の女性が新たに罹患し、41 万人以上が死亡する疾患であり、女性のがんの中で最も多い割合を占めている。欧米諸国では、1990 年以降罹患数に比して死亡数は減少傾向にある。一方日本では、罹患数および死亡数は欧米の 4 分の 1 程度と低い状況であるが、1970 年以降罹患数および死亡数ともに急激に増加しており、切迫した問題となっている。

日本において乳がんの罹患率は 30 代より徐々に増加し、40 代後半でピークを迎える。近年、晩婚化・晩産化が進み、平成 21 年には第 1 子出生平均年齢は 29.7 歳となっている。このような状況下において、妊娠期から育児期に乳がんの診断を受ける女性、乳がんに罹患した後妊娠する女性も増加しており、検査ならびに治療を行いながら妊娠・分娩期、さらに育児期を迎える女性へのケアに携わる機会が増えてきている。

しかし、乳がん合併妊産婦への看護ケアは確立されておらず、助産学や母性看護学の教科書にもほとんど記述がない。また研究論文も非常に限られており、医師による治療に関する事例報告はあるものの、協働的アプローチの成果、看護・助産ケアのスタンダードを示した文献は見当たらない。そのため、臨床の場では、手探りでケアを行っている現状があり、良質なケアが行われていないことが危惧される。

２．研究の目的

本研究は、乳がんに罹患した後妊娠した女性および妊娠中に乳がんが診断された女性への看護ケアのスタンダードを構築するために、以下の 2 点を研究目的とした。第 1 に、乳がん合併妊産婦の事例を集積し、妊娠/分娩/育児期における女性の状況と支援の実際を明らかにすることである。第 2 に、乳がん合併妊産婦へのケア経験がある医療者へのインタビュから、望ましい支援、さらに支援の促進因子と阻害因子を検討する。

３．研究の方法

乳がん合併の妊産婦の事例集積は、1 か所の医療施設において医療記録から乳がん合併妊産婦の事例について、乳がんの発見、診断、進行度、治療、予後、妊娠期から産褥/育児期までの女性の経過、女性と家族の状況および支援の実際をデータとして抽出した。データは、乳がん合併妊産婦の特性および傾向を量的に分析し、状況と支援の実際については質的に分析を行った。

乳がん合併妊産婦への支援、促進因子と阻害因子を明らかにするために、乳がん合併妊産婦へのケアの経験がある医療者に、半構成的インタビュを行い、病院で行っている乳がん合併妊産婦の支援方法の実際と重要点、支援を促進する因子、阻害する因子について分析し記述した。

４．研究成果

（１）文献検討

The National Guideline Clearinghouse、The Cochrane Library、MEDLINE、医中誌 Web を用いて 2013 年 9 月までの過去 10 年間の検索を行った。‘ Breast neoplasms ’‘ Pregnancy ’‘ 周産期 ’‘ 乳がん ’ のキーワードを用いて検索し、タイトルおよびアブストラクトから周産期における乳がん患者の支援の内容に合致し、周産期の乳がんに関連しないもの、重複するものは除外し、入手可能文献とした。その結果、RCOG および NCGG ガイドライン、SR（14 横断研究）1 件、縦断研究 3 件、コホート研究 2 件が抽出された。治療方法は、乳がんのステージ、ホルモンレセプターの有無などにより選択されていた。分娩のタイミングは、各専門職が女性をまじえて話し合うべきことが明記されていた。乳がん罹患後の妊娠は、治療後 2 年以上経過してから、産科医、オンコロジスト、乳腺外科医も含めて相談すべきとされて

いた。妊娠期に乳がんと診断された女性の分娩、新生児のアウトカムは（4 文献）、妊娠中に乳がんと診断された週数の中央値は、初期（13 週）1 文献、中期（21,24,29 週）3 文献であった。実施した治療法により、自然分娩、帝王切開などの分娩様式に差はみられなかった。児の出生週数の中央値は 36 週で、妊娠期の化学療法の実施の有無によって、正期産、早産の差はみられていなかった。児の出生体重の中央値は 2770g で、妊娠期の化学療法の実施の有無による差はみられなかった。妊娠期に乳がんと診断された女性の予後と看護支援については（4 文献）、予後は乳がんと診断された時のステージに関連しており、早期発見は予後の向上に影響していた。妊娠関連乳がん群は非妊娠関連乳がん群に比べ、有意に死亡のリスクが高いことが報告されていた（pHR：1.44 95%CI:1.27-1.63）。乳がん患者への支援では、様々な職種がチームとなって取り組むべきであり、看護職者は周産期の様々な場面で意思決定を支援する必要がある。妊娠中･授乳中の乳がん早期発見の為にも、看護職はフィジカルアセスメントの技術の習得し、乳がん検診の受診や乳房の自己検診の啓発を行うべきである。

（２）乳がん合併妊産婦の事例集積研究

研究対象者は、都市部の 1 か所の総合病院にて、2006 年 4 月～2012 年 3 月に分娩し、妊娠期、分娩期、産褥期に初めて乳がんの診断を受けた女性とした。分析対象者は計 20 名であった。分娩件数に対する割合の推移は、2006 年度～2011 年度では 0.20%～0.53%と徐々に増加していた。対象の背景は、年齢 36.3±3.6 歳、経産婦 11 名(55%)であった。分娩様式は正常経膣分娩 70%、帝王切開術 25%であった。また、6 割は計画分娩であった。分娩時週数は 35 週～42 週で正期産が 8 割を占めた。分娩時出血量 369.5±217.5ml であった。75%が腫瘤の自覚により乳がん発見に至っており、初診時の妊娠週数は 6 週～32 週の幅があった。発見時 Stage 分類は、Stage2a が 7 名と最も多く、Stage4 も 1 名いた。妊娠期の乳がんに対する治療は、11 名が手術を受け、14 名が化学療法を行っていた。分娩後 14 名(70%)が健側の授乳を行い、うち 10 名は治療再開のため産後 3 日目～産後 1 ヶ月に断乳した。授乳をすることは、女性に満足感または納得感を生みだしており、そのサポートは重要であることがわかった。退院後は、妊娠出産育児と乳がん治療が併行しており、他職種と連携した長期的な継続的なサポートが必要と考えられた。これらの結果を基盤に、妊産婦への乳がん早期発見に向けての啓発活動として、リーフレットを作成した。

（３）乳がん合併妊産婦への望ましい支援

看護師および助産師 4 名にインタビュを行った。その結果、乳腺外科医、看護師、産科医、助産師、外来看護職、カウンセラーなど多職種によるチームアプローチの必要性が強調され、女性と家族を中心としたチームカンファレンスの実施が重要であることが語られた。妊娠期から分娩・産褥期、退院してからの育児期と継続的な支援が必須であることも語られ、効果的な連携方法も示された。統合的な支援を行うために、ケアのプロトコルの作成、継続的なトレーニングの実施が示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 鈴木　久美、林　直子、樺沢　三奈子、大畑　美里、大坂　和可子、<u>片岡　弥恵子</u>、大林　薫、池口　佳子、小松　浩子、成人女性の乳がんおよび乳がん検診・自己検診に対する意識調査、保健の科学、査読有、55 巻、2013、63－70

〔学会発表〕（計 2 件）

① 増澤　祐子、<u>片岡　弥恵子</u>、大林　薫、周産期における乳がん患者の支援に

関する文献レビュ、日本助産学会、2014.3.23、長崎市

② 大林　薫、富所　恵美、宮薗　有加利、仙波　百合香、田中　亜実、佐々木　壽子、増澤　祐子、片岡　弥恵子、妊娠期に乳がんの診断を受けた女性の妊娠出産育児、日本母性衛生学会、2012.11.17、福岡市

〔その他〕
「Breast Awareness　乳がんからママを守るためのガイドブック」2014 年 3 月、A5 版 10 ページ、6,000 部作成

６．研究組織
(1)研究代表者
片岡　弥恵子 (KATAOKA, Yaeko)
聖路加国際大学・看護学部・准教授
研究者番号：７０２９７０６８

(2)研究協力者
大林　薫　(OOBAYASHI, Kaoru)
聖路加産科クリニック・助産師

増澤　祐子　(MASUZAWA, Yuko)
葛飾赤十字産院・助産師

篠原　枝里子　(SHINOHARA, Eriko)
山本助産院・助産師